討議と質疑応答

シンポジスト　田中　修
岩城　見一
高阪　薫
川戸　圓
指定討論者　加藤　清
斧谷彌守一
司　会　森　茂起

森：それでは第二部の討議を始めます。司会は森が務めさせていただきます。よろしくお願いします。

五人の先生方のテーマは非常に多方面にわたっていて、興味深く聞かせていただきました。司会としては、これをどうまとめていけるか少し不安でもありますが、議論を深めていくなかで、つながりを見出していければと思っております。先生方で言い足りない部分がもしありましたら、この議論のなかでつけ加えていただきたいと思います。

今日の議論を深めていくために、お二人の先生方に指定討論をお願いしています。まずお一人目の加藤清先生をご紹介します。加藤先生は、精神医学がご専門で、戦後、京都を中心に関西の精神医学のバックボーンとなって大きな役割を果たしてこられました。現在も隈病院で診察をなさりながら、多方面にわたるテーマを探究し続けておられます。日本の文化について、とくに沖縄についてもご造詣が深いとお聞きしております。では加藤先生、よろしくお願いします。

加藤：今、紹介していただいた加藤です。もう年のせいで認知症になっていますので、みんなが何を言うたか覚えていない（笑）。だから、今、頭は白紙ですよ。無心というと格好いいけど、無心に聞いておったということは、何も分かっていないということです。しかし、何か言えそうな感じもします。

戦争の話が出ましたが、僕はちょっと戦艦大和に乗っていたことがあるんです。僕の友達は戦艦大和で戦死しました。沖縄戦が昭和二〇年四月一日から始まるんですけど、その前日、もう一人の友人は那覇沖で潜水艦と命を共にしました。一〇年ほど前からは、神人（カミンチュ）の研究をしています。沖縄へはこれまで四〇回くらい行ったでしょうか。沖縄の話が出たので感慨無量でした。

田中先生の話は、植物の葉っぱは夜の期間を測定して、それが一つの花の行動の原理になっているというものでしたが、それを聞いてゲーテを思い出しました。ゲーテが、花も茎も根も全部葉っぱから出たという葉源型の仮説というのを唱えています。何か元を探っていく。そういう考え方は面白いと思いますね。だから、今日のシンポジウムの

「花の命・人の命」というテーマにも、非常に感慨深い気持ちを持っています。

岩城先生は、「理性は徒花である」と言われた。そう言われたら、僕はすぐ納得します。ハイデガーは、「人間は世界内存在である」と言ってますが、岩城先生は「人間はイメージのなかに存在する」と考えておられるんですね。そこから見れば、理性というものは徒花かもしれない。

僕らが戦争から帰ってきてまず読んだのは、ヤスパースの本です。まず、彼の『精神病理学総論』を読まんといかんかった。それからハイデガー。みんな実存哲学です。岩城先生の話を聞いて、ヤスパースの理性と実存とについて書かれた著書を一生懸命読んでおったことを思い出しました。今から六〇年ぐらい前の話です。理性とは何かということを、実存哲学は言っておった。人間は理性だけでは駄目なんだと。実存というものとお互いに補いあわなければ、理性は理性でないし、実存は実存でない。人間は神様から少し離れた分だけ本質から遠ざかっておるから、実存になっておる。だから、理性と実存を包括するもの、すなわち第三の包括者を考えてこそ、理性は理性であるし、実存は実存たり得ると。そういうことを青二才の精神科医として当時考えておったわけですね。

浅野先生は園芸療法の症例報告を出された。僕は精神科医になって六〇年。もういろいろやりましたよ。園芸療法も、もちろんやりました。どういうことが園芸療法になったかと言いますと、戦後すぐの頃、大学病院にいる患者さんを診ていました。二三歳の女性だったと思うんですけど、彼女はいつも空を飛ぶ夢を見るわけです。その夢について、本人が「自分は性の問題を非常に抑え込んでいる。だからどうしても地上を飛び回らないといけないらしい」と言ったんですね。ああ、そうか、なかなかちゃんと自分の夢を解釈するんだなと思いました。そのうちに彼女の言ったことは、「空中を飛んでいるときにハッと下を見たら、病院に桜草が咲いていた。今までは降りようと思うとバーンと大地に頭をぶつけて、バンと飛び上がるという感じだったけれど、桜草を見たとたんに、あ、きれいだなと思って、すーっと降りられた」と。彼女はそれから何をすればいいか考えて、「花を育てよう」と思いはじめたわけですね。大学の庭は広くて畑もたくさんあったから、そこに花を植えはじめた。それがみんなの耳に伝わって、たくさんの患者さんが花を植えて楽しんだ。当時、園芸療法という言葉はなかったですけれども、そういうことがありました。

それからもう一人、分裂病――現在は統合失調症と呼びますね――の患者さんのことを思い出した。これは、園芸療法というにはかなり長い時間がかかった。四〇歳ぐらいの男性でしたね。発病のとき、かなづちをお母さんに投げつけて、お母さんは少しけがをした。それで、ものすごく深い罪悪感を持っておったんですね。入院中に、ちょうど花を育てる女性と親しくなって、いろいろ教えてもらって、「自分は木を育てよう」と考えたらしいんです。それで退院して、自分の家の庭に柿の苗を植えた。そのうちに両親は亡

くなりました。両親に対してどうしようかと思っておったら、植えた柿がだんだん大きくなって、ついに実がなるようになった。「桃栗三年柿八年」と言うけれど、八年育てたら実がなった。その実を自分の亡くなった両親の霊前に供えた。そのとき初めて、やっと自分が本当に一つの世界に統合されていったと感じて、統合失調症の「統合失調」の症状がちょっと軽くなった。「軽度失調症」ぐらいになった。彼はずっと、柿の木の成長と自分の心の癒しとを重ね合わせて見ておったんですね。僕より年は上ですから、もう九〇歳近くなっていますが、今もお元気です。

これは、自分のなかに栄養を取り入れてじっと待つ、ということですね。待つということは、どれほど人間を成長させることか。現代は、「待つ」ということをみんな知らないんじゃないかと思うんですね。八年間、実のなるまで待っとったというのは、素晴らしいことじゃないですか。それは、人間が本当に成熟するということです。柿にとっては実がなるということです。花の命と人間の命が共に成長していくという姿をまざまざと見て、植物から人間が受ける恩恵を、つくづく感じました。

それから、指導覚醒夢法というのを、僕らはよくやります。どういうふうにやるかというと、まず高い山を目の前に浮かべてもらう。その高い山に一緒に登っていきます。患者と一緒に自分も登っていくのが大事です。頂上に達したら、「あなたは頂上に達しました。今、あなたが立っているそこから、さらに登ってください」。「もっと手をかいて、足を振って、ずんずん登っていってください」。そうやってずっと登っていく練習を何回もやる。最初はうまくいかないけれども、だんだんできるようになる。患者のなかに両手をあわせて登っていく人がいて、「自分はロケットになった」と言うんですね。「そうや、ロケットや！　上にあがれ」と言っていたら、そのうちに、「私は何のためにのぼっていたのかが分かりました。天の花をつかもうとしていました」と言われた。そのときに、「ああ、そうなんや」と納得しました。さっきの女性の方は天から地上の花を見たわけですが、この男性は大地から天に昇って、天の花をとった。花の持つ力というのを印象的に感じたわけです。まあ四〇年かそれ以上前のことです。

それから、沖縄文学をやっておられる高阪先生の海人（ウミンチュ）の話。『おもろさうし』というのは沖縄の万葉集みたいなものです。僕はそれを読みながら、神人（カミンチュ）の指導のもとで一〇年ぐらい勉強してきた。「沖縄神学について」という論文も書きました。もうじき本になると思います。そういうことを思い出させてもらった。島歌を聞いて感慨無量です。夕べは沖縄の石垣島出身の大工哲弘さんという人が来て、ずっと沖縄の歌を聞いてたんです。今朝の午前三時まで。電車がなくなって、しょうがないから京都から芦屋までタクシーで帰ってきた。みんなが心配してくれて、「無理したらあかんよ」と言われたけど、まあ沖縄の熱に取りつかれたんやね。さっき高阪先生が会場に沖縄の島唄を流しておられたでしょう。それを聞いているだけでもう体が動く。ここで

踊ったろうかと思ったけど、錯乱状態と思われたらいかんと思って、やめた（笑）。

川戸先生は大切な話をされ、先生の情熱が伝わってきた。世阿弥という人はすごい人です。「秘すれば花」ということには非常に深い意味があるんですね。これを話したら一〇分では済まない。どう言ったらいいかな。「時分の花とまことの花を分ける」というのは、非常に大切なんですね。これをちゃんと知っておかないと、きれいに能はできない。これは非常に哲学的なことです。根本的には禅。『風姿花伝』の中に、六祖壇経を引用してある。禅の精神が満ちているわけです。僕の禅の先生は久松真一といいます。「秘すれば花」ということだけでも、考えても考えても分からんようになっている。「秘すれば花」というのは公案です。これが分かったら、禅がすべて分かるようになっている。花が分かればすべてが分かるというのが一番大切なことです。花とは何やとか、クズグズ考えていたらあかんのです。パッと言えんといかん。

そういうことを言えるから、世阿弥は能の大家になった。まことの花に自分がなるということですね。花になるということは非常に大切なことです。僕らは花というと見るもんやと思う。でも、「花を見る」んやなくて、「花が見る」わけです。自分を客体化する。花が見る、そういう自分になる。それが仏教の言葉でいう「言語道断」ですね。真理というのは言葉を絶する。本当の意味のノンバーバルということです。このことを花によって教えられる。室町時代の武士階級の人には、そういう素養がちゃんとあった。現代では、「秘すれば花」といわれてもピンと来ない。ピンと分かるには、魂の状態、心の状態がそういうふうになってないといかん。今日は川戸先生がものすごく熱を込めて、能の話をされたでしょう。あれは、やっておるうちに、だんだんトランス状態になるんですね。それで時間なんか問題でなくなる。川戸先生はうまいこと頭を下げながら、時間を延ばしていったね。あれはものすごくしたたかな女性のあり方、存在形式です。要らんこと言うてすんません（笑）。

森　：ありがとうございました。加藤先生の万能選手ぶりが非常によく分かる討論でした。各先生方のお話に討論を加えていただきましたので、それに対する反応や補足をお願いいたします。

田中：葉っぱが花や茎や実のもとになると、加藤先生がおっしゃったのはそのとおりです。植物のことを話題にする時、大抵花や実の話になるので、葉っぱはかわいそうなんです。今日は花がテーマなので、私も花の話をしましたが、本当は花を咲かせ、実をならせているのは葉っぱです。

光合成という葉っぱの働きは、小学校、中学校のときに習いますので、何となく分かっているつもりになります。しかし光合成、つまり水と二酸化炭素ででんぷんを作ることは、どれだけお金を使っても、今の科学では真似できま

せん。でも、そのことがほとんど知られていません。葉っぱの働きにも、目を向けてほしいと思いました。

加藤：人間は、元になるものを考えていくんです。現代人にとって、一番元になるのは何か。花の元になるのは何か。能ではそれが非常によく表現されている。能の「秘すれば花」はご名答で、一〇〇％それに答えているわけです。

森　：ありがとうございました。今回のテーマはもしかしたら、「葉っぱの命・人の命」のほうがいいのかもしれません。次に岩城先生、お願いします。

岩城：加藤先生どうもありがとうございました。先生がおっしゃった、ハイデガーとヤスパースの話はとても大切なことだと思います。しかし、私自身としては、もう少し自分たちの経験に近づけた形でとらえ直して、もっとやさしくやりたいと考えました。

私たちが実際に目で見たり耳で聞いたりしているイメージの世界と、言葉の世界との間には、多少の違いがあります。たとえば、「有限」「無限」といったものは、言葉のうえでは十分成り立つわけですが、無限そのもの、無限な存在、あるいは無限な空間といったものを、私たちが生きている世界のなかで感覚的に経験しろと言われても経験できない。ところが、言葉に慣れてしまうと、なにか無限なものが実際に存在して、それを私たちが経験できるかのように勘違いしてしまう。そして、それを人にも強いてしまう。このことは、たとえば間違った新興宗教のなかではいつも起こっていて、人間の経験や心を抑圧しています。また、個々人のレベルでも、心で思ったり言葉で言ったりしていることが「実際にある」と正当化することによって、私たちは嘘をついているわけです。つまり、私たちは言語記号的な能力、理性を持っているために、間違いを犯す可能性もあらかじめ秘めてしまっている。特に、「人の心」を考えようとしたときには、その可能性を考え、反省しながらやらないと、人のためにと思ってやっていることが、人に対するとんでもない暴力になることもある。そこを考えておきたい、というのが今日のテーマでした。

高阪：先ほどは、阪神・淡路大震災や空襲の話に時間を取ってしまいましたので、簡単に補足します。先ほど聞いていただきました、今一番人気のある沖縄出身のグループＯＲＡＮＧＥ ＲＡＮＧＥの『花』の歌詞に「花びらのように散りゆく中で」という一節があります。この歌詞には他にも「花びらのように散っていく事」「花はなんで枯れるのだろう」等、「散る」花ばかり登場します。さらに「花は何で枯れるのだろう／鳥はなんで飛べるのだろう／風はなんで吹くのだろう／月はなんで明かり照らすの」と花鳥風月も混じっています。すなわちこれは沖縄の人が歌う詩ではなく、明らかにヤマト（日本）的発想でヤマトのマネです。ＯＲＡＮＧＥ ＲＡＮＧＥはよく「アレンジレンジ」と言われま

すが、ヤマトの歌にかなり影響され、迎合しているようです。しかし、私はこれを否定するつもりはありません。ノリのいいリズム、ラップの魅力など彼らの歌は確かにヤマトの若者をつかんでいるんです。何でも楽しんでやろうという風潮に合うでしょうね。うまくアレンジして訴えてかけているとも言えます。

奄美出身の元ちとせが歌った『朝花』にも触れておきます。これはものすごくきれいな歌ですね。哀調のこもった歓迎の歌、お祝いごとやお祭りごとには、必ず最初に歌う奄美の歌です。『朝花』には『長あさばな』と短い『あさばな』の二種類あります。短い方は、歌のある席では必ずと言ってよいほど最初に歌われるものです。「あさばな」は、アサガオを指しているのか、ツユクサあるいはハイビスカスなのか。奄美の人に聞いても、どれも該当しません。「あさばな」という花が実体としてあるわけではないようです。いろいろな説があるので、ご紹介します。「あさばな」を研究した人としては、奄美に昇曙夢（のぼりしょむ）、沖縄には伊波普猷（いはふゆう）という人がいます。今日、資料としてお配りしたのは小川学夫著『奄美の島唄』の一部です。まず、「朝の端」つまり「朝の始まり」であり、「ものごとの最初」を意味するものではないかという説があります。もう一つ「浅い端」と考えれば「浅い始まりがある」と取れます。それから、「あさばなのように若く浅い女にほれて」という歌詞がありますが、あさばなのようにというのは、「付き合いの浅い女」という意味ですね。つまり「あさばな」に込められた意味として、主に「ものごとの最初」「浅い始まりがある」「浅い付き合い」という三つの説があるわけです。

沖縄の三線は水牛の爪で演奏します。これに対して、奄美の三線は細い竹でシャンシャンと弾くんです。だから、非常にか弱い、か細い哀調のある音色になります。奄美は琉球とヤマトの中間にあって、その両方から砂糖島として何百年も搾取されてきました。その悲劇の歴史から生まれた『朝花』の中に込められているのは、「浅い付き合い」という意味です。薩摩の役人が奄美にやってくる。それを歌で歓迎するけれども、心の中では「浅い付き合い」を歌っているという説があるんですね。奄美の文化的、歴史的悲哀を、ここから学ぶことができます。

森　：ありがとうございます。ＯＲＡＮＧＥ ＲＡＮＧＥの『花』のなかに、ヤマトの心が入りこんでしまっている点にも、「現代の悲哀」があるような気がいたします。「テダが花」の精神が失われつつあるということを感じました。次に浅野先生、お願いします。

浅野：「園芸療法」という言葉が入ってきたのは、一九九〇年代の初頭です。実は「園芸療法」という言葉が日本に入ってきたときに、造園関係者、農林水産省が一気に飛びついたんです。そして、療法という言葉が非常に一般化し、安直に「高齢者と一緒にお花を植えればそれで園芸療法」「明日から私もすぐできる」という感じのとらえ方をされてしまい

ました。それから一五年経ちました。

現在、淡路景観園芸学校では、アメリカの大学で四年間かかるカリキュラムを、一学年一五人、全寮制一年間、二〇〇〇時間でインテンシブに教えております。学生たちが、園芸のプロであるべきなのか、福祉が必要なのか、医療、治療を学ぶべきなのかということは、私たちの中でいつも論議されるところです。この九月から第四期生を迎えることになりますが、北は北海道から南は沖縄まで、全国から学生が集まります。兵庫県立の学校で、震災復興事業の一つです。学生一人に年間で約八〇〇万円の県費をかけ、各地に戻って活躍してもらうということをやっております。

園芸療法は作業療法の一部、あるいは同等と考えていいと思っております。ただし園芸には、非常にたくさんのプロセスがあるんですね。耕し、植え、雑草を取り、間引き、鉢上げをし、剪定をし、薬剤を散布し、施肥をし、収穫をし、その後お礼肥をする。こうしたプロセスのうち、どの部分をセラピーに活かすのかを考えるうえで、やはり私たちが、たくさんの引き出しを持っていることが必要になります。だから、植物の種類はもちろん、園芸の多くのプロセスも理解していないと、プログラムを適切に提供できない。だからこそ、園芸療法士という一つのプロの職域が成り立ち、それを養成する学校が必要になるのです。

学生は前半の一〇〇〇時間、九月から三月末までは、冬の時期ですので温室の栽培をします。そして四月から七月末まで全国の医療施設に行って、園芸を実施いたします。春入学にしますと、後半に病院や福祉施設に行きましても、ほとんど花が動かない時期ですので、九月入学にしております。そして、教えるのは基本的に有機農法です。高齢者の認知の改善などに使う場合、昔の風景、手法も分かっていないといけませんので、たとえば、稲の刈り取りは全部手刈りで行います。こうしたことも含めて指導しています。

森　：ありがとうございました。では、川戸先生、お願いします。

川戸：先ほどは時間を取りすぎました。まだ話し切れないことが山のようにありますが、口を慎みます。ただ、加藤先生が「秘すれば花がすべてだ」と言ってくださったことは、私も本当にそう思っております。私にとって、「秘すれば花」というのはどういうことなのかを、あるいは、花にとって秘するということはどういうことなのかを探求していくのが、面白いですね。私にとっては、生きるエネルギーになっています。

森　：では、企画者の斧谷先生から討論していただきたいと思います。よろしくお願いします。

斧谷：さまざまな分野の先生方にお話しいただきました。私は企画者として、それぞれが何らかのかたちでつながっていることを、みなさんに実感していただかないといけませ

ん。さきほど加藤先生がゲーテのことを持ち出されましたが、私もゲーテのことは念頭にあります。そこで、今回のシンポジウムの「企画趣旨」でも触れている解剖学者、三木成夫という人について手短にしゃべりたいと思います。といいますのは、実は、三木もゲーテの考えに学んでいまして、結局はゲーテにつながってくるんですね。

さて、人間の体がどんなふうにできあがっているか？三木成夫は植物性の器官と動物性の器官と、その両方でできていると言います。植物性の器官は内臓系なんですね。内臓系は、われわれの意思を離れ、自律神経系によってコントロールされています。自律神経系は英語でautonomic nervous system。英語ではこのほかにvegetative nervous system（植物神経系）という言い方もあるんですね。

それに対して動物性の器官は内臓系を覆っている体の壁、つまり体皮系です。動物神経系は感覚運動をつかさどっていて、体性神経系とも言います。これは何かおいしそうなものがあると、それを知覚感覚でとらえて、そこに近づいていく運動を起こすわけです。これは三木成夫によれば、「遠い／近い」のうち「近い」という性格であるというわけです。それに対して内臓系は、自分の意思でコントロールできない。たとえば小腸を考えてみましょう。人間や動物は、獲物をとらえて口に入れ、食べるところまでは自分の意思でできる。しかしその後、食べたものが食道に入り、胃を経て、小腸にいたるまでの部分は、自分の意思ではコントロールできない。小腸は栄養分が自分のところにやってくるのを、ひたすら待ち受けているわけです。この「ひたすら待つ」というあり方が植物的なんですね。

そして、人間が存在できるのは植物のおかげです。大地に生えている植物は、「遠い」太陽の恵みを受けて光合成を行う。そこからすべてが育っていくわけですから、人間が植物を通して自分の体内に栄養分を取り入れるとは、太陽と大地の恵みを自分の中に取り入れるということです。人間には、この「遠い」太陽と大地の恵み、「遠」を感じ取る感覚もある、と三木成夫さんは言っている。この「遠」を感じ取るという感覚は、今日お話しいただいたすべてにつながってくる気がします。

田中先生のお話によると、植物は春夏秋冬というタイムスパンをきちんと感じ取りながら、花を咲かせ、種を作って生きています。そして花の色の鮮やかさというのは、太陽の紫外線を遮るための抗酸化物質によるものだということでした。つまり、植物には、いろんな形で「遠」というものと交流する力が備わっている。高阪先生も、「太陽が花である」「果物のなかに太陽が宿っている」と話されましたね。また浅野先生の話には、「植物の時間にチューニングする」という言い方が出てきまして、非常に感銘を受けました。われわれの体内でも、内臓系という自分の意思ではどうにもならない自律神経系の領域では、植物の時間と同じような時間が流れているんじゃないでしょうか。

それから、川戸先生が最後のほうで、「もう一つのリアリティ」「心の花」という言葉を出されました。われわれ人間

は動物として自由に動き回れるような気になっていますが、実は、自分の意思ではどうしようもない内臓系というもう一つのリアリティがあるわけですね。今、脳科学では心は脳にあるとされ、「ある活動をすれば、脳のここの部分が活性化する」といった話が、新発見だ、新発見だ、とよく新聞などに載っています。しかし、あれはほとんど何も言っていないに等しくて、最後の結果を示しているだけですね。われわれの全体、われわれの心は、それを動かしている内臓系、そして遠い太陽と大地の恵みを含めたかたちで考えないと、絶対分からないだろうという気がします。

これは岩城先生のお話につながってくると思います。岩城先生が「分別」「識別」と言い換えて示された「悟性」という能力、これによってわれわれは感覚的な現象を識別しています。これはほかの動物にもつながっています。もちろん人間特有の識別の仕方があり、あるいは年齢によっても違ってくるのですが、そこには無意識というものが関与しているだろうとおっしゃいました。この無意識的な能力は、さきほど述べた植物器官、植物神経系に近いような気がしますね。それに対して「理性」。岩城先生は、これを言葉の世界であるとされ、もともと誤謬とか間違いを引き起こす可能性もあるとおっしゃいました。つまり、言葉によって捉えられる現象は、実際の現象には必ずしも当てはまらない。それはイマジネーションで勝手につくり上げていくことができるような世界です。今申しあげたような脳科学的な見方による心のあり方は、脳のこの部位がたまたま活性化しているという結果だけを切り取ったものです。しかしそうではなく、内臓も含めた人間のあり方があります。言葉の世界のあり方も同じで、いわゆる「言葉」と言われているものは、言葉にならないようなイメージ、沈黙、無意識を含み込んだ言葉そのものの末端だと思います。

森　：ありがとうございました。それでは、斧谷先生の議論を受けて、また先生方にお話しいただこうと思います。植物に直接関わっておられる田中先生と浅野先生はいかがお考えでしょうか。斧谷先生が言われた、植物の受動性、受け身性という問題は、田中先生のお立場からどんなふうに感じられますでしょうか。浅野先生は、植物の時間へのチューニング・インについて、話してくださいました。加藤先生から、八年間というスパンで、患者さんの時間と柿の木の時間とが連動するお話がありました。園芸療法では八年間にわたるということは、今の活動の中では多分視野に入っていないと思いますが、さまざまなスパンのリズムが、園芸療法ではどのように考えられているのか、お聞きしたいと思います。まず田中先生お願いします。

田中：「植物的な器官」「動物的な器官」という言葉から、植物は感じないという印象を持たれているようですね。それを象徴するのが「植物人間」や「植物状態」という言葉です。刺激に対して反応しないということを植物にたとえているものですが、実は、植物は刺激をすごく敏感に感じて

います。

まず視力という意味では、自分の周りにどれぐらいの植物が生存しているかを、光の質の変化できちんと知っています。嗅覚もあるし、触覚もあります。菊の鉢植えは毎日なでまわして育てていれば、太く短くたくましく育ちます。それから、種をまいたら、絶対に根は下に向かって伸びていくし、芽は上に向かって伸びていきます。これは地球の重力というのをちゃんと感じて、上と下を見分けているということです。

植物は動き回れないじゃないか、という意見があるかもしれません。しかし、植物は動き回れないんじゃなくて、動き回る必要がないんです。動物が動き回る理由を考えたらすぐわかります。食べ物を捜し求めているわけです。それに対して、植物は自分で自分に必要な栄養を作りますから、動き回る必要はありません。もう一つ、動物が動き回っている理由は、生殖の相手を捜し求めるためです。今日お話ししたように、植物は自分が動き回らずに、健全な子孫を残す仕組みを十分持っています。そう考えたら、昔から言われている「植物状態」というのと本当の植物の違いを、もう少し知っていただけると思います。

浅野：どうチューニングをするかというお話ですが、まず、リハビリテーションにおける内発的発展の可能性を探るということが、私は園芸療法の最も大切な視点だと思っています。私たちの仕事は、医療点数には入りませんが、患者を中心としたチーム医療のなかで、さまざまな情報をもとに、どのように内発的発展をさせていくか考えます。種をまくのがいいのか、あるいは盆栽がいいのか。それから、先ほども少しお話しましたが、ホスピスにおける園芸療法では、植物の花というよりも、むしろ時間の「華」をどう与えるかを中心に考えます。モーニングワーク、残された人たちのグリーフケアへどうつなげるかを考えて、植物を介在させることもあります。長期の入院になりますと、樹木、果樹を育てるということは当然ありますし、先ほど加藤先生からお話があったような、桃栗三年ということも、園芸療法の範疇にあります。

さらにもう少し考えますと、天気の悪い日にどう過ごすかという問題も出てきます。日本の文化の中には、たとえば二四節季、すなわち二週ごとに季節をめでる感性があります。短歌や連句を使いながら、窓から見える景色をクライエントとどう築き、共有していくか。我々はこれも園芸療法と考えて、学生を指導しております。すぐに土を使うのが園芸療法ではないと考え、そのなかでチューニングの多様性を考えているつもりです。

森：ありがとうございました。ここからは、何かお話のある先生に手を挙げていただいて進めていきます。加藤先生、どうぞ。

加藤：僕は三〇年ぐらい気功をやっていますけど、花も気功

をやっていると思うんです。実際感じるんですよ。

僕は西洋医学と同時に中国医学をやっていて、いろいろな植物の根を使って治療しています。だから、患者さんに薬を渡すときに、「これはナツメが入っていますよ」「これはリンドウが入っていますよ」「これはサンザシが入っています」「クチナシが入っています」と、その植物の花の名前を言うんです。ただ薬の名前を言うだけでなくて、花の名前を言うと、みんな「ああそうか、私たちの近くのものなんだな」と思う。それが一つの治療の方法なわけです。

たとえば、アレルギーの人に僕らが使っている薬は竜胆瀉肝湯（りゅうたん しゃかんとう）というのですが、そういうことを言っても分からない。でも「これはリンドウが入っていますよ」と言えばわかる。「紫色のあれですね」「ああ、そうですよ。それを飲んでください」と言う。不思議に漢方がよく効く方法ですね。

必ず僕は「あなた、花は好きか」と訊きます。庭に咲いている花を全部言ってもらうこともある。患者さんに「自分を治す花を見たい」と言われたら、「あなた知ってるでしょ」と言う。季節によっては、写真を撮ってきてもらって、それを眺める。そうすると不思議なことが起こる。花は僕らにとっては、根がどんな薬を持っておるかを示すサインです。だから僕らは花を見て根を見ておるわけです。

咽津功（いんしんこう）という気功の手法があります。どういうことをやるかというと、まず口の中で舌をかき回す。次は口の外で回す。そうすると唾液が出てくる。その唾液をずっと下ろしていく。胃のほうに飲んだらあかん。丹田に唾液が下りていくようにする。これはイメージ療法ですね。そうすると、おなかが張ってくる。これが中国でいう内丹気功、内丹法ですね。そうして溜めた唾液が薬になる。今日はちょっと調子が悪いなと思ったら、丹田にたまっている薬丹をぐーっと上に上げてきて飲み込む。そうすると一遍に風邪が治る。僕らは自分で自分の中に、薬を自己生産するわけです。

花もその内丹法をやっているのだと思います。太陽光線というのは、いろいろな波長が入っておるでしょう。虹は目で見たら七色やけど、本当はもっと多い。花の感ずる波長というのは、だいたい色でしたら一千万以上。これぐらいの光線を花はキャッチしているんですね。花は動かないでじっとしているように見えるけれども、非常に頑張っておるわけです。内丹して、根に薬をつくっている。花のいろいろな色は虫を呼び寄せるためだけではない。太陽の光線をいろいろ選択して、自分の中に薬を作っている。花が内丹法をして薬を作っているというのは植物生理学をやる先生から見たら、ちょっと滑稽な話かも分からんけど、実際自分が内丹法をやっていますと、花の心がよく分かる。

森：ありがとうございました。ほかの先生方、いかがでしょうか。

高阪：日本はすごく花に恵まれています。季節折々、いろいろな花が咲きます。そういう意味で、ここでこういう議論

ができることを非常に喜ばしいと思いました。

私は常夏の国タイに、毎年行っています。現地で日本文学について話をするとき、たとえば、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ驚かれぬる」という有名な歌を紹介します。しかしこれを、タイ語で訳しても分かってもらえません。常に暑い風が吹いているので、秋のさわやかな風なんて分からないのです。また「春過ぎて 夏来にけらし白妙の 衣干すてふ 天の香具山」も、白い服を五月に虫干しする衣替えの光景が、年中白い服を着ているタイの人には、分からないんですね。

「秘すれば花」についても、こういう概念は、常夏の国の中では分かってもらいにくいのではないかと思います。タイの私の知人で、『風姿花伝』を読み、ハーバード大学で世阿弥を研究して博士号を取った方もいますが、やはり非常に長い時間研究しないと入っていけない、相当のギャップがあると思います。一方で私が先ほど紹介した「あさばな」のように、実体がなく、「はな」という非常に抽象的な、高尚な概念だけがある。これはまた世阿弥の「秘すれば花」にも通ずると思いますね。日本が、四季折々の花にすごく恵まれているからこそ、こういうタイトルでシンポジウムが開かれるんだなと今、つくづく思いました。

森：ありがとうございます。「秘すれば花」という言葉が出たところで、能について研究会で発表してくださった、岡山大学の金関猛先生が、今日フロアに見えておられますので、もしよろしければ、コメントをお願いします。

金関：私も今、能を「心のリアリティを表現する演劇」ととらえています。例えば『井筒』という演劇は、夢を舞台とすることによって、人間の無意識の動きを正確に描写していきます。『井筒』の中では、夢が舞台となり、夢のなかで過去が再現され、願望充足が実現していく。そういった夢のとらえ方は、フロイトの理論と根本的なところで一致しますので、非常に正確に無意識や、人間の心を把握していく演劇ととらえられるのです。

世阿弥の『風姿花伝』をはじめとする演劇論は、これらをどう解釈するかはともかく、一種の哲学書として考えることもできるかもしれない。しかし、世阿弥が演劇論を書いたのは、やはりいかに優れた演劇を書くか、あるいはいかにスターとなるか、スーパースターを作り出すかということを、第一に考えてのことと思います。

その中で「花」という考え方も、いかに観客に「花」という効果を与えるかを重んじて、論じられていると思いますし、世阿弥の演劇論で非常に優れているところは、やはり観客という要素を入れて、演劇を考える点。つまり、演劇は観客という他者なしには、あり得ないということをはっきり認識して、演劇全体を考えたということではないかと思います。

『風姿花伝』では、人間の心、無意識といった問題は、表立っては一切論じられていませんが、僕自身は、実作と理

論の間にあるそうしたギャップを感じています。そのあたりは、川戸先生としてはいかがでしょうか。

川戸：ありがとうございます。私は先生と違いましてユング派なので、直接的に無意識の願望充足や抑圧が出ているといったことは、考えておりません。そこは少し先生と違うとは思います。

ただ、世阿弥が書くものは、四〇歳以降だんだん変わっていっております。そのため私は、『風姿花伝』だけに注目するのではなく、彼が書いたプロセスと、室町という時代に、能という形で表現された、彼の生き方自体に目を向けています。実作と理論の間にずれがあるという点は、あまり意識しておりませんでした。そうした見方もあると思います。また私も、そういう形で見てみたいと思います。

森：フロアから、ご意見、あるいはご質問などありましたら、お願いします。

質問者1：昭和四〇年に甲南大学の経済学部を卒業した者です。高阪先生と同じぐらいの歳かと思います。日本では「花は桜木、人は武士」という言葉がありますね。ORANGE RANGEの「花」は、私の娘が聞いているので少し知っていましたが、「花が散る」と歌詞にあるのは知らなかったです。

戦争中に大人から聞いた話ですが、「万朶の桜か襟の色／花は吉野に嵐吹く／大和男児と生まれなば／散兵線の花と散れ」という軍歌（『歩兵の本領』）でも「散る」は一回だけなんですね。自殺がイラクの自爆テロの数より多いという記事を読みましたが、大変怖い世の中になりそうな気がしています。軍歌よりも「散る」ことが強調され、太陽もどうせ消えてなくなるという歌が流行っている。明るく歌っていますから、僕も気づかなかったのですが。高阪先生、どう思われますか。

森：ありがとうございます。沖縄でも永遠に輝き続けるティダが花というより、散る花というイメージが強くなってくることと、現代の世相との関連はどうだろうか、というご質問だと思うんですが、高阪先生、いかがですか。

高阪：最近沖縄でORANGE RANGEの『花』とは逆に、テダが花を歌ったグループが出てきて、流行りつつあるようです。願わくばこうした方向で行って欲しいと感じます。

「花びらのように散っていく」という、散華の思想は有名ですが、日本の桜にイメージされるものは、よくないものもあるんですね。文学でも美しさ故に「桜の樹の下には屍体が埋まっている」（梶井基次郎「桜の樹の下には」）という言い方をしています。

「久方のひかりのどけき春の日に しづ心なく花のちるらむ」というのは、斧谷先生が引用していましたが、これはのどかないい歌だと思うんですね。つまり、桜にもいい面

と悪い面がある。アンビヴァレントな状況が、桜の中にあると思います。こういうものが両存していく文学もありますね。ORANGE RANGEは、今若者に圧倒的人気があるんですね。私もそれとなく聞いていたら、「花びらのように散りゆく中で・・・」というリフレーンの歌詞が出てきた。「現代の散華の思想かな。いや、沖縄らしさは全然ないな。これはマネかな」と思えてきました。あまりいい感じではないですね。

今の沖縄の状況は、沖縄の人がまねたのではなく、間違いなく本土の側から押しつけたものです。沖縄の人も、それを消化して、アレンジして行かざるを得なかった。沖縄で、小さな島に七〇億円かけた大きな橋がかかっています。それで通行量は一日二〇～三〇台しかない。そんな橋が二つも三つもかかっている。公共事業開発で沖縄「らしさ」というのが崩れています。

私は先ほど、タイの話をしましたけれども、タイで、「これは何の花ですか」と聞いたら、タイ語で「ドクマー」と返ってくるんですね。「ドクマーって何だい」と聞いたら、「それは『花』ということですよ」と。何を聞いても「花」とだけ言って、種類は知らないんです。呑気なんですね。そして「散る」という思想は南国にはないと思います。常に咲いていて、日本のようにはかなく散ることがない。「花」は「花」なんですね。日本人の豊かで複雑な感性は、めぐる季節と花によってできているんですね。沖縄も常夏ですから、そういう感性は、実は沖縄にもなかった。つまり、世界の一部の人たちだけが、独自の感性でもって、こういう議論ができるということも、考えておかなければいけないとは思います。

森　：ありがとうございます。港道先生、お願いします。

港道：甲南大学の港道です。非常に興味深い多くの報告をありがとうございました。まさに今問題になっていることについて、ここであまり議論されなかった点を補足させていただきます。日本の伝統においても古代、花に「散華の思想」はなく、生命力を謳歌するという面が強かったようです。明治以来の日本近代国家が、「天皇制」とともに大々的に「散華の思想」を、流行歌などの庶民に浸透する文化形態として作り出していくわけですね。

人類学者の大貫恵美子さんが『ねじ曲げられた桜』（岩波書店、二〇〇三）の中で、学徒出陣した特攻隊員たちの手記を細かく分析しています。それによれば、彼ら自身も、国家戦略によって自らの命を「散る桜」と自己理解していながら、靖国神社の桜として蘇るとは決して考えていなかったのです。ですから、「散華の思想」が日本のものだと言い切るには、留保が必要だというのが一点です。

もう一点ですが、「散る桜」という自己理解の中に自殺という概念はないことを大貫さんは表明しています。特攻というのは決して自殺ではない。大貫さんは、イラクやロンドンで起こっている自爆テロは自殺だとおっしゃっているん

ですが、それも誤りだと思います。「散る桜」の中にも、自殺という認識はなかったということを付け加えておきます。

森　：ありがとうございます。それに関して、斧谷先生。

斧谷：小川和佑さんの『桜の文学史』（文春新書、二〇〇四）のなかにも、古代の桜は、散るのをめでるようなあり方ではなかった、とあります。やはり、生命が萌え出ずることを祝う、豊穣を祈るという形でとらえられています。小川さんは、散華の思想が、本居宣長あたりから始まってきたという見方をしていたと思います。

森　：斧谷先生はこの企画を考えられるときに、「散る桜」というイメージから離れて議論していきたいと強調されていました。植物学の田中先生から見られると、散華の思想とか「散る桜」のイメージというのは、どう映るんでしょうか。

田中……？　そういう気持ちで見たことないですね。（場内笑）

森　：そういう答えが返ってくるのではないかと思っていました。ありがとうございます。最後に何か言っておきたいという先生はおられませんか。フロアからでも結構です。

質問者1：散華の思想とは違うかもしれませんが、「死して護国の鬼となる」という考え方もあったのではないでしょうか。面白いと思うのは、花は散っても、桜の木は散っていないということです。何で花だけが散っているのに、自分を、命を粗末にせないかんのか、そう考えた日本人がいたら、歴史は変わっていたかもしれないと思います。どうでしょうか。やはり、命を粗末にするような動きが出てくるのは、あまり感心できないと思うんですが。

森　：ありがとうございます。桜のイメージに関しては、歴史的な変遷を綿密に検討した研究も、すでに出ています。今の若者達が花に託して「散る」といっているのは、古くからあるイメージを単に使っているものなのか、それとも、もっと実感として「散る」というイメージが世の中に広まっているのか。この点は、私としても非常に関心があるところです。

質問者2：田中先生のお話は、さまざまな刺激、感情に対して、植物は自身で判断して、行動を起こすということでしたね。そうなると、岩城先生のカントの概念でいくと、いわゆる分別、悟性の判断は植物にできるのかな、と考えたんですが。植物や動物は言語を有しておらず、言語能力を持たずに判断する。人間は、理性で判断するということだと思いますが、仮に人間から言語能力を完全に消去した場合、動物や植物が行うような判断をできるとは、私には想像できないのです。つまり、植物の判断と、人間が言語を用いた判断というのは、どう違うのか疑問に思いました。

岩城：田中先生のお話、すごく面白かったです。さまざまな反応が、植物自体の中で行われているということですね。理性と、植物の判断・反応との区別はどこにあるかというと、理性のシステムは外在化できるということ。つまり、辞書、あるいはコンピューターのソフトのように外側に作れて、それを私たちは再度利用できるということです。

そうすると逆に、たとえば、ワープロ機能を使うようになった人間は、漢字を書こうと思っても思い出せないという状況も起こる。私たちの脳は、システム化して外に出てしまい、その代わり内部が空っぽになるということがある。植物の場合には、内部の規則を意識的に取り出して、外在化することはしていない。そこはやはり理性と違います。

今日の話を聞いていると、われわれの理性である言語記号能力がどう働くかによって、自然の見方は変わってくる。だから、今日の斧谷さんの、内臓と感覚、植物と動物、遠と近に分ける見方は、やはり一つの言語としての分け方であって、こう分けたときにはこう見える、というだけのことだと思います。ほかの見方をしたら、また全然違う見方ができる。

ですから、今日、田中先生がおっしゃった見方というのは、植物の現象を細かく研究していって、それを再度言語のシステムに直して、見直したら、これまでとは違った植物の見え方ができるという提案だと思います。われわれのものの見方は、われわれが言語をどういうふうに使うかによって、いつも違ってくる。私たちは、どういう言語を使って物事を考えているかについて、つねに自覚的でないと、あたかも、言語を離れて実在的なものが存在しているかに思えてしまい、それは非常に素朴な実在論になってしまいます。

田中：植物がいろいろな局面に応じて、適切な反応をしているというのは、事実だと思います。それを植物が、そういうふうに思ってしているととらえるのは楽しいんですが、もうちょっと冷たく評価したら、たまたまそういう性質を持った植物が生き残ってきていると考えたほうがいいと思います。

森：ありがとうございます。各先生方のお話をもっと聞きたいのですが、時間が予定より長くなっておりますので、このあたりでシンポジウムを締めさせていただきます。

今日のシンポジウムは、多様な専門家の方に、花について語っていただきましたので、どうつながるかと心配しながらスタートしましたが、議論は集約されてきたような感じもします。最後に、企画者の斧谷先生から、一言ご挨拶をお願いします。

斧谷：こちらに座っているのと、フロアでお聞きになっているのとでは、かなり印象が違うと思うので、企画者としては、うまくいったのかどうかわかりませんが、面白いと思ってくださった方が、少しでも多くおられたらと思います。最後ま

で参加していただいて、ありがとうございました。